

**<投稿論文>中高一貫校におけるリーダー育成のための
カリキュラム開発に関する研究：筑波大学附属
駒場中・高等学校の「文化祭」でのリーダー経験に
注目して**

著者	安藤 福光, 平田 知之, 田中 統治
雑誌名	筑波教育学研究
号	6
ページ	87-101
発行年	2008-03-10
URL	http://doi.org/10.15068/00155518

投稿論文

中高一貫校におけるリーダー育成のための
カリキュラム開発に関する研究⁽¹⁾

—— 筑波大学附属駒場中・高等学校の
「文化祭」でのリーダー経験に注目して ——

安 藤 福 光*
平 田 知 之**
田 中 統 治***

Curriculum Development for Leadership Education in Six-Year Secondary School:
Focus on Leadership Experiences through “Cultural Festival”
in Junior High School and Senior High School at Komaba, University of Tsukuba

Yoshimitsu ANDO

Tomoyuki HIRATA

Toji TANAKA

中高一貫教育では、教科外活動のカリキュラムに関する研究が教科と比較して十分ではない。教科外活動が生徒の学習の場として捉えられておらず、これが有する教育機能が看過されている。伝統的な私立中高一貫校の多くは、学校行事等をリーダー育成のための重要な活動としてカリキュラムの中に位置づけている。そこで本稿は、筑波大学附属駒場中・高等学校の「文化祭」に着目し、中高一貫校においてリーダーを育成する上でカリキュラムが備えるべき条件を解明しようと試みる。すなわち、在校生調査から「文化祭」で生徒たちがどのようなリーダーシップを経験しているのかを検討し、つぎにその経験が職場でどう生かされているのかを卒業生調査により明らかにする。そして「文化祭」をリーダー育成のための単元として試行し、その結果をカリキュラム評価する。これら調査の結果から、第一に生徒が自主的な活動を行なえる学習環境を整備すること、第二にリーダー経験の機会を豊富に確保

※筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

※※筑波大学附属駒場中・高等学校

※※※筑波大学大学院人間総合科学研究科

し、多様な役割を作り出すこと、そして第三に合意形成を丁寧に重ねる活動を充実させることを、リーダー育成のためのカリキュラム開発の条件として提案する。

1. 問題の設定

本研究の目的は、中高一貫校でリーダーを育成するため、そのカリキュラムを開発することにある。ここでは筑波大学附属駒場中・高等学校の「文化祭」に注目し、在校生と卒業生を対象に実施した複数の調査結果をもとにそのカリキュラム開発の条件を検討する。

中高一貫教育ではとかく教科カリキュラムの「早修」に研究関心が集中しがちである。その理由は、私立の中高一貫校が難関大学への進学実績を上げる上で、中高一貫による「早修」が有利に働いていると考えられてきたからである。中高一貫カリキュラムへのこうした評価や見方は、安藤（2005：81頁）が実施した国公立中高一貫校の実態調査によっても確認された。

翻って、教科外カリキュラムの研究は教科の場合と比較して関心が薄い^②。その理由は、教科外活動が学習活動として注目されずその教育機能が看過されてきたからであろう。伝統的な私立中高一貫校では教科と教科外のカリキュラムが等しく重視される。難関大学への高い進学実績を誇りながら、学校行事や部活動をリーダー育成にとって重要な活動として価値づけている。文武両道と表現される教育方針は、進学準備の教科カリキュラムのみでは生徒の豊かな人間性が育成されないことを自覚して掲げられている^③。

本研究では中高一貫によるリーダー育成のためのカリキュラム開発の条件を学校行事の側面から検討しようと試みる。その際、筑波大学附属駒場中・高等学校（以下、筑駒^④：つくこま）の学校行事に着目した。筑駒の生徒は高い学力を有し^⑤、様々な分野で活躍する卒業生が存在する^⑥。筑駒の教科外カリキュラムは将来のリーダー層を育成する上で結果的に機能してきた。生徒を対象にした質問紙調査の結果によれば、人格形成に有意義な学校行事として生徒の多くが「文化祭」を挙げ^⑦、とくに生徒による自主企画の活動が彼らにリーダーとしての経験をもたらしめている。

これまで学校行事が果たすリーダー育成の機能に関しては十分に解明されてこなかった。本研究では、筑駒の伝統的な「文化祭」の事例に分析の焦点を絞り込

み、その結果をもとに中高一貫校においてリーダーを育成する上でカリキュラムが備えるべき条件を検討することにした。ここで次の三つの研究課題を設定する。すなわち、第1に、「文化祭」における「デコレーション責任者（以下、デコ責：でこせき）」の役割とその実態を調査する。「デコ責」は「文化祭」の企画と運営において不可欠なリーダーとしての役割を担っており、その経験は卒業生から高く評価されている。第2に、卒業生が職場で仕事を進める際に、在校時に獲得した能力をどのように役立てているかを職種別に検討する。これにより、職種を越えて必要とされるリーダーシップと、筑駒在校時のその学習場面とを具体的に照合する。第3に、リーダー育成の機能を高めるため改善单元として試行した06年度の「文化祭」の成果をカリキュラムとして評価する。評価資料には教員集団による評価、すなわち高校2年生に試行した单元について、例年の「出来栄え」と比較した調査結果を用いる。

2. 「文化祭」の概要と筑駒でのリーダーに求められるリーダーシップ

(1) 筑駒における「文化祭」の位置づけ

筑駒は1947年に創設された中高一貫の男子校である⁸⁾。中学校は1学年120人が定員で、40人ごとの3学級からなる。高校は中学校からの連絡進学者の120人に加え、外部より新たに40人を加えた1学年160人、40人ごとの4学級に編成される⁹⁾。中学校から高校への進学は無試験進学の形をとるが、高校から筑駒に入学する際には学力試験が課される。

表1は筑駒の主な学校行事を記したものである。この表から、特定の学年を対象とする行事や6学年全員参加（中高一体）での行事など大小含めて数多くの行事が年間に開催されていることがわかる。中でも「三大行事」とよばれる「音楽祭¹⁰⁾」、「体育祭」、「文化祭」は、生徒による評価も高く、その特徴は、全ての生徒がこれら行事を卒業までに6回も経験することにある。学校行事の人格形成について生徒調査を行った結果によれば、約7割の生徒が「文化祭」を、人格形成にもっとも影響を与えた行事として回答していた（入江他、1998：147頁）。また、文化祭準備期間中の生活について、「文化祭」で手を抜くことを戒める生徒もあり、彼らにとっての重要性がわかる¹¹⁾。「音楽祭」は6月という開催時期により筑駒へのイニシエーションという教育意義を持つことを根津他（2004：110頁）は明らかにしている。対照的に「文化祭」は高校3年生が積極的に関与している

表1：筑駒の主な学校行事

実施月	名称	備考
5	校外指導	宿泊，高3を除く
6	田植え	中1・高1のみ
6	音楽祭	合唱コンクール形式，三大大行事の一
9末～10初	体育祭	全校，二日間，三大大行事の一
10	稲刈り	中1・高1のみ
11初	文化祭	全校，三日間，三大大行事の一
1	弁論大会	中学生のみ
1	ロードレース	全校
—	芸術鑑賞	高校各学年，歌舞伎・文楽・能楽

註：この表は根津他（2004：109頁）を引用した。

ので、筑駒からの卒業を象徴する行事である⁽⁴²⁾。

「高三が燃える11月の3日間」⁽⁴³⁾と言われる「文化祭」は例年11月初旬の3日間にわたり開催され、06年度で55回を数える。近年の来場者は延べ人数で1万人を超え、生徒の保護者、筑駒への入学希望者、さらに他校の生徒も来校する一大行事である⁽⁴⁴⁾。生徒は「文化祭」に様々な形態で参加する。05年度第54回文化祭のパンフレットによれば、中学校1年生から高校2年生までの各学級、高校3年生の特別班、部活動の特別参加団体、および教科の団体からなり、その数は46団体にもものぼる。特別班とは、高校3年生の学級を解体し、「ステージ班」、「縁日班」、「食品班」、「喫茶班」、「演劇班」、および「コント班」の6つの「班」に再編したものをいう。この行事では、生徒の自主企画を重んじており、毎年様々な展示が試みられている。

(2) ニーズ調査の結果にみる筑駒で求められるリーダーシップの中身

研究代表者である田中は、「グローバル化する知識基盤社会においては特定の才能や得意な分野から将来型のリーダーシップを育てる必要があって、そのとき筑駒の教育が一つの方向やモデルを暗示している（田中，2007：9頁）」とし、特別支援教育で用いられる教育的ニーズの定義に準拠して⁽⁴⁵⁾、「現在の職場でリーダーとして求められる能力と、それが筑駒時代に身に付いたと感じる度合との間のギャップ（落差）のこと」を教育的ニーズと規定している。この教育的ニーズの内容を明らかにするため、04年12月から05年1月にかけて9期⁽⁴⁶⁾から45期までの卒業生を対象に、郵送法自記式無記名の質問紙調査を実施した。調査対象は1/2

無作為抽出による2513名であり、回収率は16.7% (n=469)であった。

この調査の結果(田中他, 2005b), 下の図1中, グラフ上段の「職場で必要とされるリーダーシップ」と下段の「筑駒でその能力をどの程度身に付けたか」の間でとくに落差が大きな項目, すなわち「仕事の進め方について起案する能力(起案力)」と「職場の人間関係を察して調整する能力(調整力)」の二つが注目された。二つの能力育成に強く関係している行事として「文化祭」に着目し, そこで展開しているリーダーの育成機能に接近することにした。

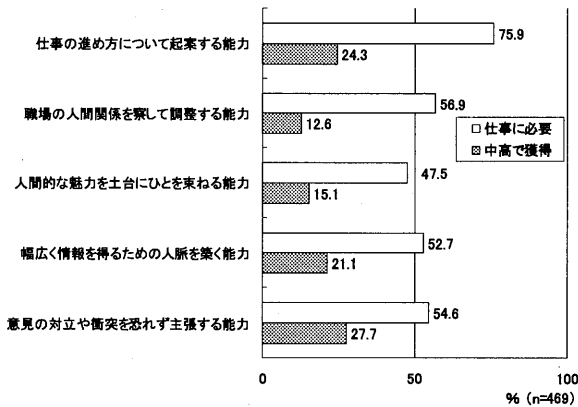


図1 リーダー育成に関するニーズ調査の結果

3. 「文化祭」における「起案力」と「調整力」の実際

(1) 「デコ責」によって生徒が経験したリーダーシップ

「デコ責」は筑駒の「文化祭」で各参加団体の展示(デコレーション:以下, デコ)の責任者である。略称の「デコ責」が校内では使われる。2学期初めから「文化祭」までの間, 毎週月曜日に「デコ責会議」が行われる⁽¹⁷⁾。06年度の場合, 1学期に2回開催された会議を含めて「文化祭」当日までに11回の会議が開かれている。これはどの係よりも多い。

これまで「デコ責」の実態は教員側も十分には把握してこなかった⁽¹⁸⁾。そこで, この「デコ責」がどのような役割を担い, その役割をどのように遂行し, そしてこの役職が生徒にどのようなリーダーシップを経験させるか, その実態を明らかにしようと試みた。

「デコ責」を対象とした調査を05年11月に実施した⁽¹⁹⁾。対象は, 中一から高二

までの各学年の「デコ責」2名、高三の各「班」の班長5名と「デコ責」1名、そして特別参加団体の「デコ責」8名の計24名である。上記生徒に匿名・自由記述式の質問紙調査を行い、補足調査として集団面接を行った⁽²⁰⁾。分析にあたっては中学生と高校生とに区別する必要がある。なぜなら、卒業までに文化祭を6回経験するので、その経験の蓄積によって、中学生と高校生の「デコ責」はそれぞれ異質なリーダーシップを発揮するからである。なお、特別参加団体と高三の各「班」の調査データは、その参加形態と「デコ責」の選出方法が中一から高二までの各学級参加とは異にしているため、以降の分析からは割愛した⁽²¹⁾。

結果を先に示せば、「デコ責」の主な役割が、「文化祭実行委員会（以下、文実：ぶんじつ）」との橋渡しをする調整役であることがわかった。それは、各デコの責任者が「文実」へ申請書類などの提出をし、その内容をめぐって彼らと交渉する役割である。しかも、仕事の遂行を円滑にする方法として役割分担を重視しているの、人間関係の調整を重視する調整型のリーダーシップを発揮していたことが明らかとなった。質問紙には、彼らが経験したリーダーシップの項目として、統率力、問題対処能力、積極性、他者理解などが挙げられた。「自信がついた」とする複数の高校生の回答には、とくに高校生が経験するリーダーの特徴が見出せた。

「デコ責」の役割を自由記述で求めた結果、中学生の場合、「『文実』とHRの情報を交換、内情を知っているので指示を出すことが多い、裏方、調整役、事務処理・叱り役」といった回答が見られる。高校生は、「班分け、指示出しをする社長もしくは独裁者、中間管理職、『文実』と学級との連絡係、演出を含めれば代表取締役」と回答した。調整役に中高生の共通点を見出せるが、高校生の回答には「社長」という最高責任者としての役割もあった。この差異は各デコの内容と「デコ責」の関わり方が影響している。上級学年では演劇を行う団体が多く、調整役を超えた役割が「デコ責」に付与される。たとえば、「独裁者」と回答した高校生は「自分のデコの企画に対しても深く携わっていた」という⁽²²⁾。「演出の面を含めれば代表取締役」という自由記述も見られた。

仕事を円滑に遂行するために工夫した方法を尋ねた結果は次のとおりである。中学生の場合、「役割分担を明確にしたり、強引に進めたり、率先して仕事をしたり、また、皆から案を求めるのではなく自分の案に対する了承をとったり、決定事項は口頭ではなく紙で説明したりしていた」との回答を得た。これに対し高校

生の場合、「上手な班分け、こまめな状況の把握、仕事を任せるか自分であるかのどちらか、トップダウンもやむをえない、高二是自分の役割を理解しているのでリーダーシップを発揮している人間を上手に使うって仕事を進める」などの回答があった。

仕事の進め方の特徴として、団体内の人間関係を重視し、役割分担によって仕事を進めていたことが推察される。ある高校2年生によれば、『文実』が高校2年生であるため、融通が利いた」という旨の発言をしていた⁽²³⁾。どのように融通が利いたのかは定かではないが、彼らが何らかの「コネ」を利用して、仕事を有利に展開していたことは明らかである。中学生から高校生になるに連れて、より高度な交渉術を展開していくところに、「デコ責」としての熟練さが窺える。彼らは「根回し」なども含めて、硬軟両面の戦術を織り交ぜながら、きめ細かな合意形成によって仕事を進めるという調整型のリーダーシップを身に付けているのではないかと考えられる。

このように、「デコ責」には、仕事の進め方に関する「起案力」と人間関係の「調整力」が求められており、これはアイデアを思いつくオリジナルな思考力と、他者の視点を推察しながら合意点を探るといった社会的な能力であるということできる。中・高生が意識するリーダーシップの差異に自信と他者理解がある。「自信を持てるようになった」と回答した高校生2名の質問紙の回答を検討したところ、一人は「デコ責」経験が3回目であり、もう一人は初めての経験であった。初めて経験した生徒は、長年文化祭に携わってきた友人と示しあわせて立候補したと述べていた。つまり「文化祭」に積極的かつ継続的にフォロワーとして参加している。この点で、リーダーは、継続的なリーダー経験によってリーダーシップを育むことが必要であると同時にまた、継続的なフォロワーの経験によるフォロワーシップの習得もまた必要である⁽²⁴⁾。「文化祭」では生徒たちが合意点求めて仕事を進めるので、より丁寧な話し合い活動を行っており、このようなリーダーとフォロワーの両役割が彼らの経験内容に厚みを持たせている。

(2) 職場で生かされる筑駒でのリーダー経験

次に、06年12月に有職卒業生を対象に実施した集団面接の結果を検討する⁽²⁵⁾。個人々が得意とする領域で発揮される「領域依存型」のリーダーシップも経験されているのではないかと仮説のもと、「文化祭」での経験が実際の職場でどのように生かされているのかを調べた。すなわち、職場で実際に発揮される「起案

力」と「調整力」の内容は職種によって異なると考えられるから、面接では職場でのよりリアルなエピソードを抽出する手法を採った。

面接対象は、19期から41期（50歳代から30歳代）の有職卒業生10名⁽²⁶⁾であり、その内訳は、中高一貫校教員1名、理系大学教員2名、文系大学教員1名、国家公務員1名、コンサルタント1名、ルポライター1名、マスコミ2名、福祉関係1名であった。設問項目は、自己紹介、現在の職業に生きる筑駒の経験、私立中高一貫校とは異なる筑駒の特徴、「文化祭」などの6年一貫の経験がもつ意味、そして筑駒での教育に欠けていたものなどからなる。なお、自由かつ創発的な議論を促すため、議論の軌道修正は行わなかった。

職場でのエピソードとそれに関連した就職後に役立った筑駒での経験を尋ねた結果、次の三つの特徴が読み取れる。第1に、職場で求められる力として、「起案力」と「調整力」の「深さ」が指摘されたことである。第2に、集団内で「丁寧な合意形成」を図ることのもつ重要性が再三言及されたことである。そして第3に、筑駒の「文化祭」には「リーダー生徒としてのキャリア」を生み出す機能が内在していることである。

第1の「起案力」と「調整力」の「深さ」は、国家公務員の卒業生が指摘したものである。彼は「起案力」と「調整力」は表面的なものを指す力ではないと述べた。つまり、起案力とは単に書類が上手にかける力ではなく、調整力も単に人と仲良くできる力ではないと言う。それはこれからの国家公務員に必要な新しいリーダーとしての力であり、早いうちからこの資質を養う必要があると語った。マスコミ関係の卒業生も番組制作で人間としての底力が必要であることを指摘した。「深さ」のある「起案力」と「調整力」は、自分の頭でものを考え抜いて掘り下げて起案する力であり、また自分とは意見の異なる他者と出合い、それを乗り越えて調整する力である。これは次に検討する「丁寧な合意形成」と通底している。

第2に挙げた「丁寧な合意形成」を行う力については、複数の卒業生からこれに関する回答が寄せられた。「文化祭」に限らず、筑駒の様々な場面で「丁寧な合意形成」が行われる。ある卒業生は筑駒を「合意形成を重視する学校」と述べた。とりわけ、マスコミ関係の卒業生の経験は示唆に富む。彼は海外特派員勤務の際に、「文化祭」での企画を成功させた過程できめ細かく合意形成を図った経験がきわめて役立っていると語った。中東イラクの戦場で、現地に駐在する日本の唯一

の報道機関として、在中東外交官および現地人スタッフとの間に信頼関係を醸成する必要があった。筑駒時代の経験をもとに異国人とも信頼関係をつくり、その結果、戦時の難局を乗り越えることができたという。戦争報道という緊迫した状況において、この卒業生は現場で試行錯誤しながら臨機応変に対応していくリーダーシップを発揮していた。この事例からわかるように、筑駒のリーダーとフォロワーの間では双方に納得するまで粘り強く話し合う「説得」が求められ、徹底した合意形成が重要視されていることがわかる。

そして第3は、「文化祭」がリーダー生徒としての「キャリア」⁽²⁾を継承させる形で一定の教育機能を果たしている点である。「文化祭エリートコース」と表現したある卒業生の言によれば、それは高校1年生で「中夜祭実行委員」、2年生で「文化祭実行委員長」、そして3年生で「ステージ班」を担当するコースを指す。「エリートコース」の呼称に込められた意味は、勉学以外の面で一芸に秀でていることが求められるからである。筑駒の「音楽祭」を事例分析した根津他（2004：116-117頁）によれば、中高一貫により形成されるリーダー生徒の「キャリア」は、「上級生」としての役割モデルであるという。この役割モデルの学習は、中高の先輩と後輩間で、ひいてはリーダーとフォロワーの間で「見る・見られる関係」によって行われる。高校3年生で「ステージ班」を担当したある卒業生は、彼らのステージを参観した中学1年生が自分もいずれは「ステージ班」をやりたいと述べたことを聞いて、「これ以上の賛辞は無かった」と当時を回想している（筑波大学附属駒場中・高等学校編、2007：136頁）。このエピソードが示すように、「文化祭エリートコース」は「上級生」としての役割モデルを学ぶコースとなっており、それが中高の生徒間で伝承され再生産されている点に注目する必要がある。

4. 「起案力」と「調整力」を育成する新しい「文化祭」の試み

(1) 「文化祭」の単元化にともなう高校2年生の参加形態の再編

06年度に実施した第55回文化祭では高校2年生の参加形態に改変を加えた。具体的には「起案力」と「調整力」の育成を目指す学習の場として「文化祭」を単元化し、従来、学級ごとに参加していた高校2年生を「組」に再編した。「組」は高校3年生の「班」と類似するものであり、「映画」、「コント」、「演劇」、および「展示」の四つの「組」に形態を改変したものである。「班」と同様に、所属する

「組」についても生徒の自由選択制とした。この再編の理由は、「文実」による高校2年生の「文化祭」への参加形態を変えたいとの要望があったからである。すなわち、高校2年生の場合、各学級によるデコが例年、演劇に集中してきたことへの反省であって、「文実」は第54回文化祭の直後から課題を検討し、生徒へのアンケート調査、学年集会での説明会と討論会、および職員会議への提案を行い、参加形態の再編構想を進めた。約半年の活動を経て生徒および教員からの賛同を取り付け、構想を実現させた。我われはこの改変を学校行事の単元化として検討し、改変による成果をカリキュラム評価によって調査することにした。

(2) 教員による「文化祭」の総括

すなわち、教員たちが「文化祭」の改変点をどう総括しているかその評価を調べるため、07年2月、筑駒での校内研修会時に無記名自由記述式の質問紙⁽²⁸⁾を配布し終了時に回収した(n=44名、回収率73%)。記述意見の総数は46件であり、このうち肯定的な評価と解されるものが17件、否定的な評価と解されるものが29件であった。

肯定的な評価には、自主参加の形態であるために各「組」に意欲的に参加する生徒の姿を挙げて、また、課題であった「演劇」への集中傾向が緩和され、生徒が例年でない別のデコに携わったことを指摘する意見がある。たとえば、「今年はクラス解体によって、それぞれが自らのデコに積極的に取り組んでいた」という自由記述に示される。逆に否定的な評価は、生徒が各「組」のデコに取り組むときの「温度差」への懸念を示し、従来の学級別で参加する方が集団の合意形成が丁寧に行われていたとする意見である。この意見は、「(生徒が)やりたいことを選んだことで、集団内の話し合いがかえって十分にできなかったのではないかと思う」という記述に表明されている。

ここで「文化祭」の改変点についての評価を総括すれば、まず学級という枠を解体したことにより、新たなリーダー経験の機会が創出された。高校2年生は「組」の中で新たな人間関係を結び、例年とは異なり「同好の士」を引っ張る形でリーダーシップを発揮することが求められた。各「組」の内部では、デコの作成に積極的に取り組む生徒がいる一方で消極的な生徒もおり、リーダーには質の高いデコを完成させるために、集団をどのようにまとめていくかが要求されたことになる。

つぎに合意形成の方法について、興味・関心を同じくする「組」の方が、デコ

の内容に関して確固とした考えをもって参加する生徒が少なからず存在するので、生徒間の利害の対立が起こりやすい。このため話し合いが困難化することは想像に難くない。実際に教員はそれを感じ取っていた。しかし、デコに関する議論の收拾がつかない場合でも、期日までにデコを完成させなければならないから、リーダーにはこれの解決を図るための「起案力」と「調整力」が重要であり、フォロワーとの間に例年以上に合意を丁寧に取り付ける必要があったと推測される。このように、「文化祭」の参加形態の再編は、リーダーに対してより過酷な状況を作り出した。彼らにとってはこの状況を乗り越えて、デコの質をいかに高めるかという二重の役割が求められていたのである。

5. 結論

以上の検討から、中高一貫校においてリーダーを育成する上でカリキュラムが備えるべき開発の条件として以下の3つを指摘することができる。

第1に、生徒が自主的な活動を行える学習環境を整備することである。リーダー育成は筑駒の学校文化によるところが大きい。筑駒の「文化祭」には教員が生徒の活動に意図的に介入していない傾向がある。この傾向が「駒場の自由」と言われる所以であるけれども、しかし、それは放任を意味しているのではない。生徒たちは自由の中で自ら考え行動しなければならない。つまり個人の行動に責任が課される。「デコ責」生徒への調査結果から、彼らは「文実」との調整役として活動し、デコを充実させるために多様な方法を駆使して、責任をもって自らの仕事を遂行する様子が窺えた。「デコ責」という役割が、彼らに「起案力」と「調整力」を要求していることがわかった。

第2に、リーダー経験の機会を豊富に確保し、多様な役割を経験させることである。「文化祭エリートコース」という「キャリア」の形成において、上級生と下級生は「見る・見られる関係」にある。これはリーダーとフォロワーの関係であり、リーダー教育には両者の相互作用が欠かせない。「デコ責」を対象とした調査の結果によれば、リーダーの経験が他者理解につながって、他者がリーダーになった際には積極的に協力しようという意識を育んでいる。リーダーを育成する上では、リーダーシップを発揮し経験しうる多様な場面が重要となる。また、リーダーシップとフォロワーシップの両者を経験するためには、生徒が得意な分野と領域でリーダーシップを発揮する仕組みをカリキュラムにおいて一貫させる必要

がある。これは高校入試がない中高一貫校のカリキュラムでこそ可能となる条件である。

そして第3に、合意形成を重ねる活動を充実させることである。卒業生へのグループ・インタビューの結果、彼らの多くが合意をきめ細かく生み出した経験をもとに職場での仕事を進めていることが明らかとなった。リーダーがメンバーの意見を集約し、その合意点を探りながら、一つのものを作り上げる。そのためには、個々人の異なる意見を調整し、新たな企画を構想することが鍵となる。本稿で強調してきた「起案力」と「調整力」は、こうした合意形成を図るために必要な能力である。

本研究で試みた「文化祭」の単元化は、「組」という従来とは異なる人間関係の場を作り出し、生徒に別様のリーダーシップを求めた。単元開発としての課題は同じ自由選択制をとる「班」との差異化にある。また「組」で経験したリーダーシップが今後どのように生かされていくのかという長期的な教育効果も検討課題として残る。以上、中高一貫校でリーダーを育成するためのカリキュラム開発の条件をまとめれば、中高一貫教育での6年間を「見通し」ながら、これらの条件を加味した教科外カリキュラムを一貫させることが求められる。伝統的な私立中高一貫校や筑駒のような進学校において各界のリーダーが育成されてきた事実を鑑みれば、教科と教科外のカリキュラムを分けて考えるのではなく、一体化して開発していく必要がある。

註

- (1) 本稿は、第一筆者が全体を執筆し、第二筆者が情報提供者、第三筆者が研究統括者としてそれぞれ加筆と修正を行った。また、本研究の成果は、「筑駒中等教育研究会」（筑波大学附属駒場中・高等学校と筑波大学教育課程学研究室との共同研究会）での議論の集積であり、その成果提供に対し、記して謝意を表す。
- (2) たとえば根津他（2004：107頁）や安藤（2006：34頁）は、教科カリキュラムの一貫性を扱う研究の多さを指摘している。
- (3) 田中（2005：29頁）は、「ひとは才能を発揮できる領域においてこそリーダーとなれる」という考えから、才能を教科カリキュラムで、リーダーシップを教科外カリキュラムで育成するという二分法に否定的な見解を示している。
- (4) 後述するように、この学校は母体である大学の改革および名称変更により数度の名称変更を経ているが、本稿では筑駒で統一する。
- (5) 筑駒は首都圏の中学校受験界で屈指の難関校であり、かつ卒業生の難関大学への進学

- 率が高い。たとえば、06年度の東京大学への合格者数は66名である（筑波大学附属駒場中・高等学校駒場会，2007：452頁）。この人数は高校定員160名の約4割に達する。
- (6) 一例を記せば、筑駒の卒業生は、学界、政界、官界、芸能界など、様々な分野でリーダーとして活躍している（鈴木，2005：428-431頁）。
 - (7) 遠藤他（1996）、入江他（1998）による。また根津他（2004）が実施した卒業生への回顧的な調査結果では、「文化祭」に限らず筑駒の学校行事全般への評価が高いことが指摘されている（根津他，2004：109-110頁）。
 - (8) 当初は中高一貫校ではなかった。東京農業教育専門学校附属中学校として開校し、東京教育大学東京農業教育専門学校附属中学校となり、附属高等学校が新しく1950年に設置された。52年に東京教育大学附属駒場中・高等学校となり、中学校卒業生が全員高等学校に進学した59年に完全中高一貫制となった。筑波大学附属駒場中・高等学校に改称したのは78年である（筑波大学附属駒場中・高等学校，1997年：154-216頁）。
 - (9) 高校段階において高校入学者のみの学級はない。中学からの連絡進学者と高校からの入学者とが3：1になるように学級が編成されているという（根津，1999：102頁）。
 - (10) 音楽祭の教育機能については根津他（2004）を参照。
 - (11) 筑波大学附属駒場高等学校教務部進路指導係（2005：19頁）。前年度の高校3年生が次年度の高校3年生に大学受験までの生活と学習に関する助言をまとめた冊子である。
 - (12) この点は次の記述に見出せる。すなわち「一年前から準備しても、終わってみればあつという間だったし、達成感というよりは筑駒での6年がもう終わってしまったという虚無感？の方が大きかったけれど、何一つ間違いなくやり通せたことを誇りに思うし、最後の文化祭でこんなすばらしい思い出を作れたことを幸せに思う（傍点は筆者による）」という（筑波大学附属駒場中・高等学校，2007：380頁）。
 - (13) この他に「一万一千人を超える来場者数」とも形容されるという（筑波大学附属駒場中・高等学校，2007：76頁）。
 - (14) 筆者が05年11月の「文化祭」を参観した結果による。また06年12月に共同で行った卒業生へのグループ・インタビューの際にも筑駒の教員より言及がなされた。
 - (15) 田中他（2005a：14頁）は、特別な教育的ニーズをもつ生徒のためのカリキュラム開発が特別支援教育を中心に行われてきたことに言及した上で、ハイ・タレントな生徒に対しては一部の分野に限られてきたことに対して疑問を呈した。そして、リーダー育成を特別支援教育の一環として位置づけることを提案している（田中，2005：29頁）。
 - (16) 筑駒では「期」でその学年を呼称する。開校1年目の中学校1年生が「1期」である。なお07年度現在、中学校1年生は61期であり、高校3年生は56期である。
 - (17) 筑波大学附属駒場中・高等学校第55回文化祭実行委員会（2006：4-5頁）による。
 - (18) 05年8月31日および同年10月15日の筑駒中等教育研究会において筑駒の教員により言及された。これは第一筆者の研究会でのメモによる。また、「文化祭」に関する調査研究でも「デコ責」の名称が記されている程度である（遠藤他，1996：101頁）。
 - (19) 調査の概要は安藤（2006）を参照。本項はこの内容を再構成し加筆修正した。
 - (20) 筑駒中等教育研究会での議論から原案を作成し同研究会員で修正作業を施した。な

お、質問紙の配布と実施は筑駒教員が実施したが、集計作業と分析は大学の教員が分担した。なお、集団面接は大学側の研究会員が中心となって行った。

- (21) 特別参加団体の「デコ責」に関する調査結果については、安藤（2006）を参照。
- (22) 集団面接時の生徒の発言から。第一筆者が当日書き記したメモによる。
- (23) 同上。
- (24) 根津・安藤（2006）はリーダー経験の「接続」（articulation）という点から、筑駒の生徒が小学校時代にどのようなリーダー経験を有していたのかを検討している。
- (25) この集団面接の詳細な記録は、安藤他（2007）および安藤（2007）に所収されている。なお、この調査での第一筆者の役割は調査補助および記録であった。
- (26) 集団面接に参加した卒業生の一部は、筑駒の前身校である東京教育大学附属駒場中・高等学校（教駒：きょうこま）の卒業生である。
- (27) 「一定の職業内または組織内におけるハイアラーキカルな地位系列をたどる移動の過程（organizational career）」（日本教育社会学会，1986：148頁）を指す。「生徒のキャリア」とカリキュラムの役割に関しては田中（1996）を参照。
- (28) この質問紙は、第一筆者が筑駒中等教育研究会のメンバーである筑波大学の研究者と討議して作成し、筑駒に持参の上、配布および実施した。

文献・資料（50音順）

- ・安藤福光（2005）「中高一貫校のカリキュラム開発とその教員組織に関する調査研究」『カリキュラム研究』第14号 75-88頁
- ・安藤福光（2006）「文化祭活動によるリーダー形成」筑波大学附属駒場中・高等学校『2005年度 筑駒「リーダー形成」プロジェクト報告書』29-35頁
- ・安藤福光（2007）「駒場卒業生座談会の記録」筑波大学附属駒場中・高等学校『2006年度 筑駒「リーダー形成」プロジェクト報告書』19-36頁
- ・安藤福光・根津朋実・田中統治（2007）「附属駒場中高卒業生による座談会の結果の概要」筑波大学附属駒場中・高等学校『2006年度 筑駒「リーダー形成」プロジェクト報告書』13-18頁
- ・入江友生・遠藤正之・岡崎勝博・小澤富士男・鹽谷健・曾根睦子・高橋宏和・八宮孝夫（1998）「学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について」筑波大学附属駒場中・高等学校『カリキュラム改革調査研究プロジェクト 中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究』報告集第3集 141-151頁
- ・遠藤正之・岡崎勝博・小沢治夫・加藤勇之助・関口隆一・曾根睦子・辻弘・寺田恵一（1996）「学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について」筑波大学附属駒場中・高等学校『カリキュラム改革調査研究プロジェクト 中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究』報告集第1集 93-109頁
- ・鈴木隆祐（2005）『名門高校人脈』光文社新書
- ・田中統治（1996）『カリキュラムの社会学的研究』東洋館出版社
- ・田中統治（2005）「これからのリーダー教育のあり方について」筑波大学附属駒場中・高

- 等学校『2004年度 筑駒「リーダー形成」プロジェクト報告書』29-30頁
- ・田中統治 (2007)「3年間の研究を終えて」筑波大学附属駒場中・高等学校『2006年度 筑駒「リーダー形成」プロジェクト報告書』9-12頁
 - ・田中統治・根津朋実・藤田晃之・井上正允 (2005a)「中高一貫校における才能教育とリーダー育成のためのカリキュラム開発研究(1)」筑波大学教育学会第4回大会(於: 筑波大学附属小学校)発表要旨
 - ・田中統治・根津朋実・藤田晃之・井上正允 (2005b)「中高一貫校における才能教育とリーダー育成のためのカリキュラム開発研究(1)」筑波大学教育学会第4回大会(於: 筑波大学附属小学校)発表資料
 - ・筑波大学附属駒場高等学校教務部進路指導係編 (2005)『2005年度進路懇談会資料 高校3年生の学校生活と受験勉強』
 - ・筑波大学附属駒場中・高等学校編 (1997)『創立五十周年記念誌』
 - ・筑波大学附属駒場中・高等学校編 (2007)『創立六十周年記念誌』
 - ・筑波大学附属駒場中・高等学校駒場会 (2007)『駒場会報 復刻版 第119号～第149号』
 - ・筑波大学附属駒場中・高等学校第54回文化祭実行委員会 (2005)『文化祭パンフレット』
 - ・筑波大学附属駒場中・高等学校第55回文化祭実行委員会 (2006)『平成18年(第55回)文化祭準備要項』
 - ・日本教育社会学会編 (1986)『新教育社会学辞典』東洋館出版社
 - ・根津朋実 (1999a)「『中高一貫校』のカリキュラムにおける接続の問題」『筑波大学教育学系論集』第23巻 第2号 97-109頁
 - ・根津朋実・井上正允・田中統治 (2004)「中高一貫校の異年齢構成による学校行事が果すリーダー形成機能」『カリキュラム研究』第13号 107-120頁
 - ・根津朋実・安藤福光 (2006)「リーダー形成を支える特別活動の意義」筑波大学附属駒場中・高等学校『2005年度 筑駒「リーダー形成」』13-28頁

付記

本稿は、04～06年度科研費補助金(萌芽研究)『中高一貫校における才能教育とリーダー育成のためのカリキュラム開発研究』(研究代表: 田中統治)による研究成果の一部である。

また、安藤福光・平田知之・小林汎・宮崎章・井上正允・根津朋実・藤田晃之・田中統治「中高一貫校における才能教育とリーダー育成(3)―駒場卒業生へのグループ・インタビューの結果を中心に―」と題し、筑波大学教育学会第6回大会(2007年3月17日 於: 筑波大学附属駒場中・高等学校)で発表した内容に加筆・修正を加えたものである。